

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 出口 智之^{でぐち ともゆき}

本論文は幸田露伴の明治期の作品を対象に、これらが同時代の文学概念とは異質な性格を持っていた点を明らかにし、それによって近代小説が前代から切り落としてしまった要素、および本来そこに秘められていた可能性を再評価することを企図したものである。

第一章ではまず、夏目漱石との共通点から説き起こし、露伴の文学に備わる豊穡な笑いの要素を再評価した上で、ともすれば立志や芸道に評価の主軸が置かれがちであった従来の露伴像の軌道修正がはかられている。

第二、三章では根岸党と呼ばれる文学グループの活動を精査した上で、露伴がそこから独自の「笑い」を学び取っていった経緯が明らかにされている。これらは従来不明の点の多かったこのグループの実態解明に大きく寄与するものであり、旧時代の残滓を引きずる要素が強いとされてきた定説に修正をせまるものである。

第四章では「対鬪體」、第五章では「二日物語」、第六章では「風流魔」の三作品がとりあげられている。いずれも作品の構想が繰り返し変更され、発表後もたびたび改稿されている点に着目し、そのプロセスを実証的に跡づけることによって、作者露伴が作中世界に対して独自の倫理観を持ち、それが逆に同時代の小説との距離を育んでいくことになる必然が明らかにされている。「対鬪體」論においては論者自らの発見した草稿が重要な役割を果たし、「二日物語」に関しても西行説話に関する典拠が初めて確定されるなど、資料を丹念に掘り起こし、実証的に踏査していく手続きが本論の説得力をより一層高める結果になっている。

第七、八章では樋口一葉の初期作品「うもれ木」と、露伴の「椀久物語」との比較を通して両者の具体的な影響関係が明らかにされ、第九章では歴史小説「頼朝」の典拠を検討した上で、厳密な考証家、という従来の露伴像に対し、資料から離れて自由に人物を語ろうとするモチーフとの葛藤が導き出されている。あわせて終章では幸田文が父を回想した小説の分析を通し、戦後に露伴が神格化されていくプロセスが検討されている。

以上のように、本論においては、露伴が「史伝」という独自のジャンルを構築するなかで、闊達な「笑い」と「考証」との高度な両立を果たした点が具体的に明らかにされている。「^{そら}天うつ浪」など、今後検討が必要な作品も残されているが、文献実証的な方法によって従来の露伴像に大きな修正を迫り、ジャンルとしての「近代小説」が批判的に相対化される様相が明らかにされた点は高く評価される。

以上の点から、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。